

令和7年度

鳴門西小学校

「学力向上実行プラン」

学校の教育目標を踏まえた学力向上の重点目標

- ①「基礎的・基本的な知識・技能の習得と言語活動の充実」
- ②「学び合いによる思考力・判断力・表現力の充実」
- ③「学校と家庭との連携による生活・学習習慣の確立」

校長

内田 洋一

学力向上推進員

校長 教頭 佐藤 道代 研修主任 西上 真紀
 低学年推進員 1年学年主任 大野 実緒
 中学年推進員 3年学年主任 中尾 優志
 高学年推進員 6年学年主任 阿部 美希
 田中 百合恵

【各校の取組状況の把握について】

- ・指導技術や取組を共有できる研修(授業研究・グループトーク等)を行う。
- ・学校評価やチェックシートなどを活用し、定期的に取り組状況を把握する機会をもつ。

◎次の(1)～(3)をバランスよく取り組み、学力の向上を推進

(1)知識・技能の習得

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○漢字の読み書きや四則計算などについては、ある程度の定着が見られる。 ○読書に興味・関心をもつ児童が多い。 ●学力の二極化傾向が見られる。 ●長い文章を正確に読み取ったり、身に付けた知識等を関連付けたりすることに課題がある。	・文章の内容を正しく読み取ったり、要点を抑えて話を聞いたりすることができる。 ・主述の整った文章を書くことや、自分の考えをまとめて書くことが習慣化している。 ・学習の過程を通して習得した知識を、他の学習の場面で活用することができる。	・ICT(AIDリル等)とプリント教材のそれぞれの良さを生かして効果的に活用する。 ・ノートの書き方や板書についての校内モデルを作成する。 ・書く力を育てるために、「あわスタ」の活用を検討する。友達の作文を批評し合う場を取り入れる等、文章の質を高めるための取組を行う。 ・学習が早く終わった児童が取り組める内容(プリントや「キュービナ」等)を工夫し、より個別の学びに対応できるようにする。	・指導方法など、具体的方策を共有する時間をつくる。	・縦のつながりを意識しながら、各学年の目標をたて、定期的に情報を共有することで、年間通して目標にむけて、積み上げることができた。 ・ICTやプリント教材を朝の活動や復習、宿題、学習が早く終わった児童に活用し、知識の定着を図った。 ・相互参観授業を行うことで、よい実践を共有することができた。 →参加できる職員が少なかったり、1時間参観することは難しかったりした。	・目標にむけて、様々な力を高めるために効果的で具体的な実践方法を教員間で共有したり、研修などで行ったりする。 ・ICT(AIDリル等)やプリント教材の良さを生かして、より個別の学びに対応することができるようにする。

(2)思考力・判断力・表現力等の育成

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○体験活動を好み、意欲的に活動できる。調べ学習や目標が明確で見通しのつく課題には安心して取り組み、思ったことを素直に発表できる児童が多い。 ●語彙が少なくコミュニケーションに課題のある児童が多い。 ●友達の見解を聞いて、自分の意見と比べたり自分の考えを整理したりして思考を深めることが難しい。	・調べたり体験したりした情報を整理し、自分の考えを自信をもって表現することができる。 ・自分の考えと比べながら、相手の意見を聞いたり、複数の考えから新しい考えを創造したりすることができる。 ・ICTを効果的に活用して、思考をまとめたり表現したりすることができる。	・学び合いを更に充実させるために、学級集団や発達段階に応じた話し合いの目標を検討する。「徳島版読解力」を活用する。 ・思考や表現のツールとしてタブレットを低学年から使うことを習慣づける。各学年で取組の目標を設定する。	・学力テストの結果から、式や言葉の意味を考えさせるようにしていく。	・自分の意見を深めて書くことができるように、友達の見解や教師の話を最後まで聞くということも、徹底することで、自分の意見を書くことができる児童が増えた。 →最後まで聞くことができる児童も増えてきたが、いつでもどこでもできるようにするために、継続的に指導していくことが大切である。 ・資料を使って、友達と対話を行い、自分の意見を伝えるときにより良い方法を考え書くことができる児童が増えた。 ・各学級で日常的にペアやグループ活動の場面を取り入れることを通して、互いに意見を聞いたり、伝えたりする力を高めることができた。	・人の意見を取り込むことはできるようになってきたが、自分の意見と比べることができるような授業づくりを行っていく。 ・自分の意見をもち、安心して発信することができるように、認め合う雰囲気のある学級集団づくりを行っていく。

(3)主体的に学習に取り組む態度の育成

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○与えられた課題については真面目に取り組む児童が多い。家庭学習の習慣が定着してきた。 ●難しいことや疑問に思ったことを追究しようとする意欲が乏しい。学習の見通しをもって、主体的に取り組むことが難しい。 ●学習用具の準備・学習態度など、生活・学習習慣の定着が十分でない児童が一定数いる。	・学習の構えができている。 ・自分の学習の状況を振り返り、自らの課題を解決できるよう計画を立て、実践することができる。 ・家庭学習を自主的に行い、問題解決に取り組むことができる。	・学校全体で、「めあて」「まとめ」「ふりかえり」の授業の流れを統一し、子どもが自ら学びを深めることができるようにする。 ・授業のユニバーサルデザイン化を更に進める。 ・家庭学習に取り組みやすくするために、低学年から、自分で学習を進める機会を設けたり、自主学習の仕方を教えたりする。引き続き、家庭学習の手引きの見直しを行い、家庭への啓発を強化する。	・板書やノートの書き方をできるだけ、同じようにすることで、児童が、主体的に学ぶことができるようにする。	・学校全体で統一した表示(「めあて」「まとめ」「ふりかえり」等)を作成しようすることで、学年がかわっても児童が見通しをもって自主的に学ぶことができるよう取り組んだ。 ・できたことを教師が見逃さず、しっかりと賞賛することで、主体的に取り組むことが増えてきた。 ・「自主学習ノート」を活用し、定期的に学級でノートを見合ったり、教室に掲示することで進んで学習に取り組んだりする児童が増えた。	・家庭学習に取り組みやすくするために、懇談や家庭訪問のたびに家庭学習の手引きなどを活用しながら、家庭への協力をさらによびかける。 ・低学年の時から積極的にタブレットを使用することで、様々な学習の方法を身につけることができるようにしておく。